

今月の題字
星野登記子さん

(大間々町桐原)

ネパールで支援活動をしているOKバジさんを長年応援し続けている星野さん。4月に野点のお茶会を開催します。誰でも気軽に参加できます。詳しくは裏面をご覧ください。



富弘美術館特別展『山笑う』
暖かな日差しを受けた山々は、一斉に木の芽を吹き出し、淡い新緑に染まっていきます。この季節になると、富弘さんは学生の頃から、毎日のように一日一日と変わっていく春を見つめていました。それは電動椅子に乗るようになってから数十年がたつ今でも大切な時間として続き、創作の原点にもつながりました。鳥たちが歌い、花が咲きほこるこの季節が、また富弘さんのふるさとにやってきました。本展では、春の代表作

品や近作を含む八十点を展示しています。ぜひ、ご覧ください。
特別展開催中のイベント
特別展開催中の3月9日は、筑井孝子先生による「草花スケッチ」、4月6日は、ライブリーによる「季節の朗読会」、4月20日は、富弘美術館サポーターによる「鈴の鳴る道を歩こう」、5月12日は、東雲コーラスによる「母の日コンサート」、5月18・19日は茶道無径会による「春のお茶会」など、多彩なイベントを開催。詳しくは美術館のホームページをご覧ください。



特別展『山笑う』
2月27日(火)～6月2日(日)
富弘美術館

特別展『山笑う』
2月27日(火)～6月2日(日)
開館時間：9時～17時
休館日：3月までの月曜日、会期後の6月3日(月)は展示替えによる臨時休館となります。
入館料：大人520円
小中学生310円、幼児無料
*団体20名以上2割引、障がい者手帳お持ちの方は5割引



小耳にはさんだ

いい話 (文責・菊)
《343》

負けない

逃げない

諦めない

熊本の長野勝彦さんとは二十五年來のお付き合いになります。大間々のながめ余興場でも何度か講演をしていただき、群馬県内でも大野さんのファンが広がりました。二〇一六年四月に発生した熊本地震の際には「風の丘・阿蘇大野勝彦美術館」も甚大な被害を受けました。三か月後には大野さんを応援するために、ながめ余興場で復興支援イベントを開催し、たくさんの来場者から義援金もお預かりして大野さんに手渡ししました。先

日、七年ぶりに大野勝彦美術館を訪ねました。地震直後の美術館の状況を見た時は「再オープンが難しいのでは」と思っていました。が一年後に再オープンの案内をいただいた時は驚きました。その時の手紙が次の文章です。

熊本地震から一年、立ちほだかる困難に心が折れそうになることも度々でした。でも、その度に皆様のあたたかい励ましをいただき元気が出ました。道路はなくなり、電気も水もない。崩壊した丘に向って誓ったのは「負けない、逃げない、諦めない」の心を持ち続けることでした。危険な風の丘

に自己責任で通い続けてくれたスタッフ、応援してくれた友人、ボランティアの人たちには人としての心のありようを学ばせていただきました。「危険なところには行かないで下さい」と言われてきました」と笑いながら来て下さった方々、「私は一年分の有休を全部もらってきました」と何日も通ってくれた友人、「何かできることはありませんか」と家族で弁当持参で来てくれた人、「何かのお役に立ててください」と義援金を届け

ぞ、強く生きるぞと歯をくいしばっていた私でしたが、何度隠れて涙を拭いたことでしょうか。ひとつの出来事には何か意味があり、命を残された私たちは、旅立たれた人の分も本気で生きなければと思えました。

熊本地震の時の大野さんからのメッセージを読み返して、改めて能登半島地震で被害に遭われた方たちのことを思い、自分たちに何ができるか考えています。

世界一小さな 定利屋 トイレ美術館

今月の水彩画《343》
筑井孝子さん『赤城山』



前橋市在住の水彩画家・筑井孝子先生は毎年三月に富弘美術館で開催する花の講座「草花スケッチ」を指導されています。筑井先生は、富弘さんがケガで群大病院に入院していた四十数年前からご縁があり、その交流の様子は「生きることのすばらしさを感じて」と題して、中学校の道徳の教科書でも紹介されています。「今月の絵」は、去年三月の水彩画講座の際に筑井先生に描いていただいたものです。今年「花の講座」は、三月九日午後一時半から三時半まで。定員は十五名。ご希望の方はお早めに富弘美術館にお申し込み下さい。

靖ちゃん日記

令和六年二月十八日(日)
全国芝居小屋会議に参加。会場の熊本県山鹿市に全国から芝居小屋関係者が集まり、会議や交流会で旧知の仲間と楽しいひと時を過ごした。
旅先での楽しみ方のひとつは朝のウォーキング。昨日の八千代屋周辺の賑わいがウソのように朝の街は静寂に包まれ、ゴミも落ちていない。朝六時、歩いて10分の「さくら湯」へ行った。四百年近い歴史があり、道後温泉と同じ雰囲気九州最大の木造の銭湯は天井が高く、男湯と女湯の仕切りも古風だった。毎朝来ているというふいふいふ人たちは語りだした。「昔は風呂が五円。近くに赤線もあつた。あの頃は男湯と女湯の湯舟の間に人がくぐれるくらい穴が開いてた」と言っていてエッチな想像をしてしまった。穴があつたら入りたいと思つた。
昔の共同浴場は男たると大衆欲情だったのかもしれない。



虹の架橋 検索で、インターネットからでもご覧いただけます。

第三百四十四号は令和六年四月一日(月)発行予定です。

靖ちゃん(似顔絵提供) ひさかさん